

『希望を確かにする』ローマ5:1-2

5:1 このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。

5:2 わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。

●序論：

聖書が語る「希望」は、そうした“うまくいくといいな”という不確かな願いとは違います。

聖書の希望は、神の約束に根ざした確かな将来への信頼です。

それは、今も未来も、神がご自身の御手で導いてくださるという確信です。

そしてこの希望は、神さまのご計画として与えられると、聖書は語るのです。

エレミヤ29:11 主は言われる、わたしがあなたがたに対していただいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。

神のご計画の中にある希望、だから信仰者はこれを確かなものとして信じるのです。

5:2 わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。

この希望を喜ぶ者とされている。ではそれは何か？

今日はその「聖書の希望を確かにする」ために三つに分けて見ていきたいと思います。

●本論

I. 永遠のいのちの希望（死を越えた約束）

まず最初の希望は、「永遠のいのち」です。ヨハネ3:16

3:16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

聖書が語る「永遠のいのち」とは、単に「いつまでも生きること」ではありません。それは神との「平和な関係」が永遠に続く命のことです。

パウロは、信仰者の生きる土台をこう語っています。

5:1 このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。

この恵みによっておおわれた、安心に満ちた関係は、この世の命が終わっても途切れません。

そうして、イエス・キリストが十字架と復活によって示してくださったように、この肉体の死でさえも、終わりではなく、「帰るべき家」への入り口となるのです。

信仰者にとって希望とは、「死んでも生きる」約束、「死を超える希望」です。

「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。」（ヨハネ11:25）…とある通りです

それは、やがて神のもとで再び会えるという確信ともなります。だからこそ、クリスチャンの葬儀には悲しみの中にも希望の歌が流れるのです。

さらにこの言葉は、「死んでも大丈夫」「天国に行ける」という“慰め”にとどまりません。むしろ、“今ここで、死を恐れず生きる力”を私たちに与える希望となります。

もし死が人生の終わりなら、苦しみは無意味で、人生は偶然で、未来に保証はありません。しかし、キリストが復活し、永遠のいのちを約束された時、人生は大きく変わりました。

苦しみは無駄にならない。愛も労苦も神の前に覚えられる。今の人生は永遠のいのちへ続く道の一部となる。

主イエス・キリストの約束の希望にあって、今を生きるわたしたちの人生の労苦は無駄ではないとわかるのです。

Ⅱ. 神がともにおられる希望（現在を支える確信）

聖書はこう語ります。

「わたしは、決してあなたを離れず、あなたを捨てない」（ヘブル13:5）

神は、苦しみの中にも、悲しみの中にも、ともにいてくださる方です。

イエスさまについて、マタイが始めと終わりに記録するこれらの言葉は印象的です。

「…その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。これは、「神われらと共にいます」という意味である。（マタイ1:23）

「…見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。（マタイ28:20）

この「神さまが共にいてくださる」ことの確信こそが、クリスチャンを支える希望です。

ダビデもまたその困難の中でこの確信を握りしめました。

たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れませんが、あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。
(詩篇23:4)

聖書は、わたしたちが生きるこの世には困難があるとはっきり語ります。
その中で希望とは、必ずしも「状況が良くなること」がすべてではなく、「神がともにおられること」を知ることによって生まれる、神さま由来の安心なのです。

そこに、福音生活にある、クリスチャンの「違い」が生まれるのです。

Ⅲ. すべてが新しくされる希望（神の国の完成）

三つ目の希望は、やがて神がすべてを新しくされるという約束です。
わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。
(黙示録21:1-)

不思議な情景が預言されていますが、必ず来る未来の出来事を聖書は語るのです。

目を転じて、今の世界の現実は今、悲しみや争い、不正や痛みで満ちています。けれども、聖書は、最後に、神さまがこの世界を回復し、新しい天地を備えてくださると語っています。

…「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいにとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。…」(黙示録21:4)

・死が終わる ・涙が終わる ・痛みが終わる ・罪すら終わる…こう語ることができるのは、イエス・キリストが十字架と復活によって、罪の呪いの歴史に終止符を打ち、新しい創造を始められたからです。

これは「世界の滅亡」ではなく、神の愛による、世界の再創造の約束です。
人の罪によって壊された世界の不和も、混沌をも、神さまご自身が作り変えてくださること、それが「神の国の希望」です。

この黙示録が示すのは、「良くなればいいな」ではなく「神ご自身が造り変える未来」なのです。

●最後に

信仰者であるわたしたちへのチャレンジは、3つです。

①「永遠の命」に人生の視点を定める

死を恐れなくてもよい人生は、自由です。わたしたちの価値、人生の意味、歩みの方向は、“永遠”の視点から照らされます。

そうして、時に ・痛みにも意味があるとわかる。 ・胞子が神に覚えられていることを知る。 ・赦しが人生を変え、生かすものとなるとわかる ・愛にはすごい力と祝福があるとわかるということです。

②「神が共にいてくださる」事実を告白する

祈る時、「どうか～

してください」という祈りになることが多いかもしれません。

しかしまず、告白してください。「神は今日も私と共におられる」と。

どんな状況の中でも、その一言の告白が、あなたの日々を支える土台になります。

③「新しい天と新しい地」を思い見る

今経験している苦しみを「ゴールのない重荷」としてではなく、「神が共に担ってください、終わりのある重荷」として背負うことができます。

未来が明るいと、今日が変わります。この希望を、心にいつも置いてください。

さあ、この希望を知る者は、現実の社会の中で、絶望ではなく「希望のしるし」として生きることができます。神が最後にすべてを正しくしてくださると信じて、私たちはいま、愛と正義を実践することができるのです。

黙示録で、御座にいます方（イエス・キリスト）が言われた言葉があります。

21:5 すると、御座にいますかたが言われた、「見よ、わたしはすべてのものを新たにする」。また言われた、「書きしるせ。これらの言葉は、信すべきであり、まことである」。

この3つの希望が、信仰者の心に光をともします。そしてその光は、暗闇の中を歩む人々をも照らしていくのです。そうしてこう言えるのです。

5:2 わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。